シンポジウム「明日の富士山を考える」

日時：令和 4 年 11 月 16 日(水) 18:00～19:30
場所：ふじさんホール（富士吉田市）

【司会】
・本日のシンポジウムは、世界遺産登録から 10 年余り経過した富士山の現状や課題を多くの方と共有しながら、富士山をよりよい姿で未来につないでいくための方法を皆さんと考えていくために開催。

＊＊第 1 部　山梨県からの報告＊＊

【山梨県】
●世界遺産登録時から指摘され、対策が進んでいない富士山の問題は大きく 3 つ。
①人が多すぎる
・インバウンドツアーの大幅増、安価な観光地・迎える側も薄利多売（富士山の浪費）
・「オーバーツーリズム」かつ「ゼロドルツーリズム」
②環境負荷が大きい
・電気屋上下水道が未整備のため、人が増えるほど更に環境負荷が増える悪循環
③景観改善が必要
・五合目は人工的景観が広がり、自然・景観・信仰に調和した景観形成が必要
・世界遺産や国際的な山岳リゾートにそぐわない景観、インフラ
●課題・今後の方向性
・来訪者数を積極的にコントロールすることが必要
・「量」を追うことから、「質」重視へ（ハード、ソフトとも）転換が必要
・付加価値を生み出し、大切な富士山を守ることに還元する仕組みづくり
⇒　持続可能な富士山保全に向け、どのように実現するか議論を

＊＊第 2 部　パネルディスカッション＊＊

パネリストは、
・一般財団法人環境優良車普及機構会長の岩村 敬 様
・富士山五合目観光協会会長の小佐野昇一 様
・上智大学大学院　地球環境学研究科教授の織 朱實 様
・山梨県富士山科学研究所 所長の藤井敏嗣 様
・富士吉田市長の堀内 茂 様
・東京大学大学院 農学生命科学研究科准教授の山本清龍 様
コーディネーターは
・認定 NPO 法人富士山国民会議運営委員長の小田全宏 様

【小田氏】

・私は富士山の世界遺産運動に携わってきた。たくさんの方々のお力をいただき、改めて感謝申し上げる。あれから 10 年経ったが、さまざまな課題が今も残る。
・それを皆さんと一緒に力を合わせて解決し、よりよい富士山を未来に残すため、今日をスタートにしたい。
・最初に自己紹介を兼ねて、富士山との関わり、富士山に対する思いなどご披露を。

【岩村氏】

・36 年間、国の役人を勤め、2003 年小泉総理の時代にはインバウンド政策を立案した。山中湖に小屋を持ち、長年そこに来ている。
・2015 年に富士五湖観光連盟主催の、富士山の観光と環境を考える検討会で議論し、昨年は山梨県主催の同じく 5 合目に鉄道を引くという話で議論し、それぞれ報告書のとりまとめに参画した。

【小佐野氏】

・家業が 5 合目の売店で、生まれたときから富士山 5 合目で過ごすことが多かった。
・2020 年に観光協会長に就任して初めの仕事が新型コロナウイルスの感染症対策。ガイドラインを作成するなどしたが、観光業はコロナの影響が非常に大きい。
・富士山 5 合目は標高 2305m、自然豊かで富士登山、観光の拠点。一方、事業環境としては非常に厳しい場所。電気 水道は通っておらず、各施設が自前で確保。気候も厳しい。
・おもてなしの心と先人の苦労を忘れず、富士山を後世に正しく引き継いでいきたい。

【織氏】

・専門は、環境政策と環境法。小笠原の世界遺産科学委員を務めているほか、奄美、知床の世界自然遺産の調査を行っている。また、それらの地域で、SDGs 普及にむけての講演も実施。
・最近の研究テーマは持続可能な観光や地域参加型の世界遺産価値保全。
・富士山のキャリングキャパシティ（収容力）の検討が必要。今までの観光スタイルでいいのか、どのような観光を目指していくのか、地域参加型の戦略を考えることが必要。
・その際、オーバーツーリズムによる環境面の影響を考えながら議論したい。

【藤井氏】

・これまで地球の内部の構造やマグマの研究をすると同時に、マグマの性質と噴火様式の関係について研究してきた。富士山は 2000 年頃から研究している。
・富士山科学研究所では宝永山の成り立ちを明らかにしたが、火山としての富士山にはまだわかっていないことも多い。

・富士山は日本国内では研究が進んでいる方だが、火山防災の仕組みは諸外国に比べれば立ち遅れている。火山研究を進め、火山防災の進展にも貢献したい。

【堀内氏】
・富士吉田市自体、富士山の中で育ってきた街。江戸時代から山岳信仰の皆さんを数多く迎えてきた。富士山の歴史とともに発展してきたのが富士吉田。
・最初は自然遺産登録を目指したが、人が多すぎる、観光地化されているなどで断念。そこで富士山の山岳信仰と芸術の源泉を大きなテーマに世界文化遺産を目指し、実現。
・イコモスの条件に、地元が富士山をしっかり守ることが付記されている。
・日本人の心の拠り所でもある富士山の自然を壊すことなく守り、歴史的文化的価値を構成に残していくことが、私たちに課せられた大きな仕事。

【山本氏】
・高知県で生まれ育ち、大学生になって初めて富士山を見た。
・2001 年、山中湖にある東大の演習林に赴任し、以降、富士山に関わり、育ててもらった。
・例えば登山者数の上限設定の議論や富士山保全協力などに立ち上げから参加。非常に勉強させていただいた。

【小田氏】
・二巡目は、それぞれ富士山の課題を一つ絞っていただき、対応方針なども含めお話を。

【岩村氏】
・スバルライン等の問題について検討した際、山岳観光で有名なスイスを 3 年で 7 回訪問。
・ユングフラウヨッホには 100 年以上前から鉄道がある。一登山家が一般の人にもこの景色を見せたいと私財を投げ打って始めた事業。現在はスイス観光の大きな目玉に。
・一方、富士山五合目は昭和のドライブインに見える。当時は賑わっていたが、団体旅行が廃れ個人旅行に変わって、今ではほとんど残っていない。
・外国人も最初の団体旅行では富士山に来ても、リピーターになればレベルの高い観光を望む。五合目には二度と来ない。このままでは明日はない。量から質へ転換が必要。
・外国人の消費のベストスリーは宿泊、食事、買い物。それが揃っていないところは、単に人がゴミを落とすだけで将来は全くない。

【小佐野氏】
・現場で一番問題に思っていたのは、ごみと渋滞。
・ごみについては、団体や個人による大がかりな清掃活動などにより年々解消の方向。
・渋滞についても、夏期のマイカー規制拡大でほぼ解決の方向にいっていると認識。
・ただし外国の方が増えたことでごみ問題が再浮上している一面もある。

・言葉の壁もあるので、多言語やイラストでルールやマナーを伝える工夫が必要。
・SDGs 活動を本格化し、持続可能な観光地として残っていくため、関係者と協力したい。

【織氏】
・関心事は 2 つ。1 つ目は持続可能な観光はどうあるべきか、2 つ目は世界遺産は誰のものなのか、誰が守るべきなのか、ということ。
・世界自然遺産第 1 号のガラパゴスでは、登録後あっという間に観光客が増え、外来種の急増や地元漁民の反発など様々な問題が発生。そうした危機を乗り越え、現在ガラパゴス観光協会は、対価をきちんと払ってくれる観光客だけを選別して受け入れる管理型のサステナブルツーリズムに方向転換。
・100 万円を支払う一人の観光客か、1000 円を支払う 1000 人の観光客か。ガラパゴスは前者を選択。富士山では地域としてどれを選択するのか。
・ガラパゴスの子どもたちは、世界遺産地域に住んでいることを誇りに思っている。一方、富士山麓でそうした子がどれだけいるかが気になる。
・国内各地で調査しても、地元では自分たちの地域の宝の価値が必ずしも認識できていない。どれだけ価値があって、素晴らしいことかが理解されていないことが課題。
・保全活動を担うのは地元の方。自然、環境、文化を守ることが地域の観光＝お金に返ってくる仕組みがなければ、持続可能性はない
・富士山を地域でどう守るか、どのような観光が必要か、地域の皆さんと議論が必要。

【藤井氏】
・富士山は 10 万年前から活動を始めた火山だが、今のようなきれいな形になったのは 3000 年前。あまり浸食もされず美しい姿を見せているが、300 年前の宝永噴火では山頂火口より大きな火口が山腹にできた。人がいくら登ったところで影響を受けるほど火山体はやわではないが、噴火が起こると今の姿がいつ破壊されるかわからないのが火山の宿命。
・噴火によりさまざまな災害が発生する可能性。溶岩流を出す噴火ならそれほど形は変わらないかもしれないが、300 年前と同じような爆発的な噴火なら大きく地形を変えるし、大量の火山灰や火山礫を周辺にまき散らす。
・今後も富士山を信仰の対象として、観光の資源として活用するには火山防災は必須。
・雪代（スラッシュ雪崩）は歴史的にも甚大な被害を起こしてきた。スバルラインのある 4 合目から 5 合目はスラッシュ雪崩が発生しやすいため、さらに洞門整備が必要。
・数百万人が訪れる 5 合目には電気が来ていないため発電機による大気汚染が進んでいる。欧州で観光地開発するときは、まず上下水道を整備し、電気を引く。日本はそうではない。
・富士山を観光名所にするには、噴火などの災害への備えと環境に対する配慮が必要。

【堀内氏】

・オーバーツーリズムについて、富士吉田側から登る登山者は、たった 2 カ月ちょっとで 26 万人、静岡側も入れると 30 数万人。山体にものすごい負荷をかけているのが現状。
・そのため富士吉田市では、観光協会や山小屋組合などに協力いただき、登山客が安全・快適に、また登りたいと言われるよう、登山者を減らす努力をしてきた。
・10 数年前に受益者負担として協力金を提唱し、とんでもないとあちこちで言われながらも、最終的には静岡県側も含めて実現できた。
・弾丸登山の問題についても、スバルラインの夜間規制やバスの発着時刻の繰り上げなどにより、ピーク時の 3.5 万人が、今年は 1 割以下の 2700 人まで減少。
・富士吉田市としては、適正な（吉田口の）登山者数は 15 万人位が限界と考えている。
・また 5 合目の混雑は東京の繁華街のそれをはるかに超えており、ある程度整理が必要。そのためスバルラインの規制を実施。
・マイカー規制期間中は山麓の駐車場でマイカーからバスに乗換えるが、電気バスが利用されている。性能が上がり、1 回の充電で 5 合目を 3.5 回往復できる。
・藤井先生ご指摘のとおり、スバルラインの 4 ～ 5 合目がスラッシュ雪崩でふさがれても、電気バスは滝沢林道が使える。
・例えば電車の架線や軌道システムは大工事になるが、電気を通せば 5 合目の環境改善が進む。2035 年を見据えて電気ステーションを設置したり、災害防止のための機器を稼働させたりできる。し尿処理も新しい方法でできる。その運動をしている。

【山本氏】

・都市公園ではスマホで撮った映像を解析し、どんな方向に人が歩いているのか自動的に集計する取り組みが進んでおり、電気があれば国立公園などでも可能。そうした基礎的データの収集など、電気に期待するところはある。一方、災害対応を考えると、実は外とは切り離して自立していることも重要。
・国立公園は、いつでもどこからでも、誰でも対価を払わずに利用できるのが原則だったが、混雑や渋滞の解決、登山者のリスク対応などのため、来訪者管理の仕組みが求められるようになってきたのが近年の動き。
・富士山を下から見ると登山道が幾何学模様になって見える。本来、幾何学模様がない自然の中にどういう線形を用いるのか、どういうデザインを用いるのか、景観と風景を守ることを意識すべき時期に来ている。
・オランダでは、ビルディング・ウィズ・ネイチャーの考えの下、人工物の見えない河川堤防や砂で盛土する養浜など、自然の作用や生態系の能力を活用し、自然や環境に配慮しながら防災を図っている。
・富士山でも、土地の起伏や地形を尊重しながら、被覆としての植生などをどう守るかが問われている。

【小田氏】
・最後にこれだけは皆さんに伝えておきたいということお話を。

【岩村氏】
・富士山のオーバーユースはひどい。月に 70 万人が来るのは異常。これをどれ位に抑えるか。仮に 30 万人にする場合でも、輸送密度で考えると 1 日に 1 万人は運ばなければならない。
・それを本当にバスで運べるのか、という問題を念頭に入れる必要がある。今は夏場に 15 便、運んでいるのは 1000 人足らず。ほとんどが観光バスで来ている。
・観光バスを止めて定期バスで運ぼうとしたら、何百台のバスが必要かということも考える必要がある。
・環境問題、排ガスだけの話ではなく、オーバーユースによる一種の公害。これを防ぐには、電気バスでは解決しない。

【小佐野氏】
・５合目はじめ富士山に関するさまざまな課題は、必ずしも富士山だけに留まらず、麓にも影響する可能性がある。
・河口湖の観光業者から、５合目に行けないと麓の観光客も減るという話を聞いた。
・観光ありきではないが、富士山に対して何か策を講じるときには山麓地域や住民の皆さんの生活にまで影響を及ぼす可能性があることを十分に認識した上で意見交換し、富士山の素晴らしい姿を後世に引き継ぐにはどうするかを真剣に考えなければと思う。

【織氏】
・世界遺産の戦略目標として保全と信頼性のほかにキャパシティビルディング：地元の能力構築、コミュニケーションが大きな課題となっており、ここ数年、イコモス、ユネスコから、コミュニティーによる世界遺産の価値の配分、地域社会による世界遺産の管理、コミュニティーのベストプラクティスモデルの報告書が出てきている。
・世界各地の世界遺産で、一番身近にいる地元が世界遺産登録によってどんな価値をもたらされているのか、それを地域はどう管理していくかという視点の議論が行われていることを最後に報告しておく。

【藤井氏】
・５合目を観光地として使うためには、鉄道であれバスであれ、スラッシュ雪崩の対策をしっかりやらなければ、観光客の安全は決して守れない。
・どこで噴火が起きるかわからない富士山では複数の避難路を確保する意味で、滝沢林道の整備は非常に重要。
・電源を引くのは最低限必要。５合目に引くことも重要だが、できれば山頂までの電源を

きちんと確保したい。不足している5合目以上の観測点を整備する上でも電源が必要。

【堀内氏】
・これ以上富士山をいじめず、できる限り現状をしっかりと維持していくことが一番大切。
・その中で、電気ケーブルをまずは5合目、そして最終的には山小屋全てにまで届くような形でやっていくことが最重要課題。
・富士山を稼ぐ道具にしてもらいたくないというのが地元の考え。

【山本氏】
・富士山を量から質へ変える考えには大いに賛同。
・国立公園には大きく分けて「目的達成型」と「時間消費型」があり、富士山はどちらかといえば目的達成型だが、それを時間消費型に変えていくのは結構苦労するだろう。
・将来的には富士山保全協力金を基金化し、現在の自治体管理から自立させ、いろいろな新しい取り組みへの貢献や、地域内調達、地産地消が起きるところに投資しては。
・今まで利用者に負担を求めてきたが、地元も負担する、あるいは幅広く国民的が支えていくような富士山の姿もあってよいのでは。

【小田氏】
・今日は第1回目ということで、これからまた、皆さんと大いに議論していきたい。
・量から質へ、また電気の問題、あるいは「また来たい」と思っていただけるような富士山にしていく、そのために、これから皆さんと大いに議論して、具体的な実行に進めていければと思う。

以上